

---

# もう君を離サナイ

吉良 すた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう君を離サナイ

### 【Zコード】

Z5983X

### 【作者名】

吉良 すた

### 【あらすじ】

父親の転勤で小学校三年生の夏から 今までアメリカに住んでい  
た 工藤勇斗は、 父親の一度目の転勤で、 Z県渚町に戻つて來た。  
転校先の高校で出会う不思議なヒロイン達。 そして、 再会した  
幼馴染の片桐咲 だんだんと壊れて行く日常を止める事は 出来る  
のか？

作者のiPhoneのデータが全て消えてしまったため、 投稿出来

なくなってしまったので  
名前を吉良 すたから、吉良 すたに変えて  
登録し直す事にしました。

IDも変わっていますが、本人なのでこれからもよろしくお願いします。

今まで、読んでくれた読者の皆様  
何かと面倒だと思いますがこいつった形で連載を再開する事にした  
ので、よろしくお願ひします。

## プロローグ・別れのナツ

「あたしの事好きでしょ？大きくなつたら、結婚しよーね！－約束だよー！」

「え～（、・）イヤだ…」

だつて咲すぐ泣くんだもん…それにオネショもするし、泳げないから海にも行けなくなつちやうし、えつとお~他にはあ~…」

「ふええツ。・。・（ノ・）・。それ以上言わないでよお~。（（（：。・。）））（）（）」

「わ、わかつたから泣くなよお…（、・ー・）ジューースあげるからさあ…」

「だつてえ、勇斗がひどい事言つから…（、・ー・）それにもひ、勇斗が居なくなつちやうか…」

「うう…でも仕方ないよ。父さんがアメリカの会社に行く事になつたから…でも、すぐ会えるよーな（^ - ^）」

アメリカでもたくさん友達作つてまたいつか帰つてくるからな（^ - ^）もしかしたら、アメリカ人みたいに、髪の毛が金色になつて帰つてくるかもな（^ - ^）」

「あははつー勇斗にきんぱつなんて

似合わないよー！」

「う、うるせーしー…帰つても結婚してやん  
ねーぞ…（ゝ人ゝ・）」

「ふええツ！それはヤダー…必ず戻つて来てね…待つてるからね。

」

「うん。元気でな…」

そして、思い出の詰まつたこの町に大切な人を残して、オレは自由  
の国

『アメリカ』へ飛び立つた…！

今から、八年前の夏。小学校三年生の頃の話である…

この頃は良かつた…でも、戻レナイ…

転勤そして、転勤…

突然だが、オレ」と工藤勇斗は凄く不安である。理由は、小学校三年生まで住んでいたこの町に帰ってきたからだ。何しろ、先週までアメリカのカリフォルニア州に住んでいて、

か「アメーリカンな暮らしに染まつてしまふ」と、日本での生活を忘れていて

「おまえが、何をアレカリ進んでいたのか」二つ目

「えっと…靴は脱いで上がるんだつけ?」

「当たり前じゃないか勇シ（へへ）！房できて初端がどそんのだつたら、Heavenにいる

Motherが 哀しむる(、ー：、)「ハイハイ：分かりましたよ」

おかーさんかーせんー（棒読み）」

「おい！謝るならちゃんと謝れ（へへ……）しかしオレの嫁は綺麗

そう、唯一の家族工藤祐介の転勤によるものだ。

そして、会話から分かるように母親は

親父（祐介）が言つには、アンジェリーナジョリーと、石原さとみ

そして、五をかけた位の美人さんだつたらしハ。

## 親父が写真を

亡くしてしまつたためにオレが見る事は出来ない。あの親父…いつか費ひたる！

କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

「はーもしもー、ひらか藤です

あつ 部長!無沙汰します。無事に日本にも着きました!えつ?ち  
よつ?ナーベル君ですか?

よつ?それ本氣ですか?

分かりました。」ピッ！

話さなくてはいけない事がある...

落ち着いて聞けよ……勇斗……父さん、今度はオーストラリアに行く事になつた。」

「サムライ・マジド・ホラセル、なんだよ？」

「その事なんだが、禰斗お前はどうしたい？」

「オレは……ここに残るよ……！だつて  
せつかく戻つて来たんだし、入学手続きも済ませてあるんだし。さ  
あ、とつと行つた！オレも18だ！いつまでもガキじやないつ  
事！」

「ううう。 (ノ ) (ノ ) 勇斗は成長したな!  
ダディ嬉しい!」

「オッサンが泣くなよ（・・・）気持ち悪い。月一で、お金振り込むの忘れんなよ。」

さつきは潰したるなんて言つたが、

こんな親父でも、母さんが死んだあと男で一つでオレを育ててくれた大切な家族だ。だから、

親父の仕事の邪魔はしたくない。

「じゃあ、行つてくるぞ（ヽ・＼：）ノシ

「今からかよつー?」

そして、荷物を整理し終わって  
いろいろな手続きも終わったオレは明日から  
高校三年生ってわけだ。

## 転勤やじて、転勤…（後書き）

とつあえず、一話まで再投稿中。

この調子であげて行くので

前にお気に入り登録してくれた皆さん  
こちらをよろしくお願いします。  
マジですこません。

やつと会えたね……

覚えてますか？あの日一緒に遊んだ公園を…

覚えてますか？イジメられていた私を助けるために自分の身体を

傷つけてまでケンカした

あの空き地を…

覚えてますか？貴方が突然私に言つた別れの

コトバを…貴方は忘れてしまっているかもしません…でも私は、

全て覚えてます。

貴方が行つてしまつ前に交わした会話の一語一句から、私との約束

…そして、貴方に対する私の気持ち…全部覚えてます。貴方がアメ

リカに行つてもう、八年も経つんですね…私は貴方の事ばかり

考えていました。

貴方はもう此処にはいないのに…

ずっとスキデスキデスキデスキデスキデス

キデスキデスキデスキデスキデスキデスキ

デスキデスキデスキデスキデスキデスキ…

壊れてしまいそうです。

目覚まし時計がなつた。花柄の可愛い時計だ。  
この目覚まし時計は、今は、離れてしまった  
幼馴染が、「お前はよく遅刻するから」と誕生日  
にくれた大切な物なのだ。『いつも通り』に風呂  
に入り、『いつも通り』に朝食を取る『いつも通り』  
に登校し、

『いつも通り』に帰宅する。この退屈極まりない日々が片桐咲にとっての人生だつた。  
幼馴染がいた頃は、毎日が希望に溢れ生き生きと  
していた。イジメられていた事もあつたが、  
幼馴染が助けてくれた。

彼女にとって『幼馴染』こそが全てだつた。

そんな幼馴染の『彼』が居ない今彼女は死んだに  
等しかつた。

「いつてきます。」

『いつも通り』の通学路を通り、  
『いつも通り』のクラスの自分の席に座る。

ただ、一つ『いつも通り』ではない事があった。

「おーいよひごべー！今日はこのクラスに  
転校生がやって来るぞ！」

三組担任の、長谷川が声を張り上げてみんなに言う。

「マジで？男？女？」

「イケメン君ならいいなー〇（ ）〇」

(ハカハカしい…それ位で騒くんじゃないわよ)

「残念だつたなア岸辺。男子だ。そして、新川正解ツ！かなりのイケメン君だぞ！」

「マジかよつーんだつまんねーの！」

- 1 -

「てゆーか何だよ？先生の次くらいのイケメン  
つて、全然先生カツコ良くねーよー！」

卷之三

ハイハイ静かに！そして、

「マジかよ~」( )( )..( )..( )..( )..( )..

(何なのみんな…ぐだらない…ウザいよ…)

「そういうえば、言つて忘れてた。転校生君は何と、アメリカから来たんだぞ！たしか…カリフォルニア州だつたかも…じやあ、呼ぶぞ！工藤君！入りたまえ！そしてよつこそ！爽やか三組へ！」

(えつ？工藤？アメリカつてまさか…)

「アメリカのカリフォルニア州から来ました。工藤勇斗です。この町には、小学校三年生まで住んでいました。これから、1年間よろしくお願いします！」

そこには、八年間思い焦がれた顔があった。

少し癖つ毛のある髪  
爽やかな顔立ち  
やや長身で、色白。誰が見ても美男子と呼べる  
片桐咲のよく知る人物…

幼馴染の工藤勇斗本人だった。

(会いたかったよ…勇斗お…)

涙がこぼれるのを我慢しながら、

勇斗を目に焼き付けていた時だった

「じゃあ～工藤君の席は…あそこが空いてるな。  
片桐の隣だ～仲良くしてやれよ～」

「は、はい～！」

神様：私

生きてて良かつたです…。・。・。( )・( )・。・。

## やつと会えたね…… 2

「えっと…初めまして。工藤勇斗です。  
これからよろしくお願ひします。」

ずっと好きで思い焦がれていた、勇斗が田の前にいる。爽やかな雰囲気は変わっていなかつた。  
でも、『一つ』だけ変わつた事があつた。  
私の事を忘れているらしい。自分はこんなに待つて居たのに…忘れた事なんてなかつたのに…  
名前を言つたらおもいだしてくれる力ナ…？

「嫌だなあ～…ハジメマシテじゃなくて、久しぶりーの間違いでしょ？」

あたしだよ？咲だよ？覚えてる？」

忘れられたショックで折れそうになる心を必死に我慢して、元気な声で答えた。

(思い出してくれなかつたら、死のうかな…)

「サキ…？カタギリ…片桐…咲…あ～！！咲！片桐咲！思い出しだ！！」

「本当に…！良かつた…ハジメマシテなんて言われてショックだつたよ…」

「アハハツ！悪い悪い…」

「何だ、片桐お前工藤と、知り合いだったのか？」

「ちょつどいい…片桐！工藤に、学校を案内してやつてくれー！頼んだぞ！」

「わ、分かりましたー…」

その後、咲に学校を案内してもらい教室

に帰ったオレを待つて居たのは転校生恒例の質問攻めタイムだった

なんとか、全ての質問を回答して逃げるようこの咲と帰った。

「ああ…つかれた。こんなに疲れたんだな…学校つて…」  
「すぐに慣れるよーそれより、あたしは聞いた事があるんだけど…」  
…

なにかドス黒いオーラが咲から放出されている

「岸辺君が言つてた質問の答えなんだけど…」

「な、なんだよ…？」

「彼女はいますか?つて質問だよ?覚えてる?」

「そういえば、そんな質問があつたよ!」

「彼女はいないが、G i r l F r i e n d は居ます。つて  
答えてたよねえ…どういう事力ナア?」

「いや、フツーの友達だつた」

「ふうーん… そつなの…」

「ああ、そうだよ。妬いてるのか?」

「べつ別に妬いてなんかないもん!…!」

「それは、やておき…久しふりだな。

本当に、咲と帰るなんて…まさか、25m泳げなくて、おねしょ

「それ以上は言わなくていいです!…!」

「まあまあ、言わせろよ! そんな咲が、凄く綺麗  
になつて最初気づかなかつたんだぜ?」

「い、機嫌取らうとしても無駄だよ…

無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ!」

「照れるなつてwwwあつもつそろそろ  
家に着くから…また明日ーじゃあな。」

「うん。バイバイ。」

死んだに等しかった頃の彼女は、もう居ない。

今の彼女は、あの頃のよひに生き生きしていた。

## キャラクター紹介（前書き）

キャラ紹介第一弾です！

## キャラクター紹介

工藤勇斗

くどうひはやと

好きな食べ物：日本のメーカーのチョコレート・甘い物全般  
嫌いな食べ物：果物全部・プロツコリー（以前虫が付いたモノを食べそうになつたため）

性格：活発な男の子。物事は割とハッキリと言う方だが、皆に優しいので嫌われる事のない。ちょっとぴりシャイ。仮面ライダーが好き。（平成）

特徴：身長は高いほうで細い。顔は、自称フツメンではあるが、誰が見ても美男子と言う顔立ちをしている。

特技：アメリカでやつてたバスケットボール

年齢：18

工藤祐介

くどうひゅうすけ

好きな食べ物：和食

嫌いな食べ物：出張先で食べさせられたシュー

ールストレミング

性格：キャラキャラしているようですが、実は真面目。家族思いで素晴らしい父親（自称）妻の香奈美が亡くなつた後も男で一つで勇斗を育てて來た。何だかんだでいい父親。

特徴：長身。年の割りに若く見られる。自他ともに認めるイケメン。

特技：某漫画の主人公の様に『耳の穴に耳全体を収納できる』ドヤ

ツ！

年齢：45

工藤香奈美  
くどうかなみ

祐介いわくアンジョリーナジョリーと、石原さとみとミシフイーを足して二で割り

そして、五をかけた位の美人さん。

没年27才

片桐咲

かたぎりさき

好きな食べ物：ココア。幼い頃、勇斗に勧められて食べたビスコ。  
嫌いな食べ物：ピーマン。

性格：勇斗といった頃は友達も多くて活発な少女だったが、勇斗が転校した時から毎日がつまらない物へと変わってしまい、皆から距離を置く様になった。しかし、勇斗が戻って来たため彼女の中のなにかが変わろううとしていた。

特徴：すごく可愛い部類に入る。今まで何人もの男子が告白してきたが全て断つて来ている。そのため、ついたあだ名は「絶対令嬢ブリザードガール」

「クラスでは、ハブられてはいないが友達は少ない方。勇斗に対する恋愛的感情はほんの少しだけあるが、まだちゃんと気づいていな

い。

ジョジョの奇妙な冒険という漫画が好き。

特技：家事全般。

年齢：18

長谷川拓郎  
はせがわたくろう

勇斗たちクラスの担任。

熱血。生徒達からも人気がある。

年齢：38

## ある日の日記

月 日：金曜日

今日はとてもいい事があった。八年間ずっと願っていた願い事が叶つたからだ。

七夕の短冊に書いても、クリスマスイヴの夜にサンタさんに願いしても叶わなかつた願いが今日叶つた。

勇人が、帰つて来た！！！しかも席も隣！！学校案内までしちゃつた！！

久しぶりに2人でお喋りもした。

みんなががつつくように勇人のメアドを聞いてるのを見てちょっとぴり腹が立つたけど、あたしも聞く事が出来たからよしとしよう！！！勇人は、学校の近くのマンションでお父さんと暮らす予定だつたらしいんだけど…

仕事の都合で一人暮らしだつて～～～

かっこい～！これつてもしかして、ご飯とか作りに行けちゃうかも……！！！

あたしは、気づいたんだ…勇人が好きつて！そんな事よりも、もっと嬉しい事があつた。勇人が、あたしの事『綺麗になつた』つて言ってくれた！！！！！！

ヤバイ！泣きそうだよお～。

勇人は、覚えてくれてるかな…結婚してくれる約束。

ううん…覚えてるよね。

忘れたら、許さないんだから…

よし！明日は、朝早く起きて勇人の家の詳しい位置を調べて一緒に登校するぞーーー！

今日は寝ます！！明日から同じ学校だ…早く明日にならないかな？

卷四

ツ！ ピピピピツ！ カチ

毎朝6:30にセッテしたアームの二度目で起きる。眠い。スニ  
く眠い…

大きなあぐびがでた。 それと同時に、頭の中の霧が少しだけ晴れた  
ような気がした。

「ええと…朝風呂に入つて、パン食べて、校

か…」親父に言われてから気づいたのがオレは一日の予定をわざわざ口にだす癖があるようだ。まあ、最初は恥ずかしくて顔から火が出るくらいだったのだが、よくよく考えると口に出した方が頭の中で整理しやすくて、

安全かつ確実に一日を過ごせると思つ。

そんな事を考へてゐる内に、全ての準備が終わり玄関に向かおうとす  
ると、

「おはよー！ 勇人おー！ 学校行ーーー！」

「うわっ！ 朝から元気な事。 近所めー わくだから、 静かにしりよーーー！」

咲がいた。

たしか住所は教えてなかつたはずだ。

「えへへーーー 元気だけがとりえですかーーー！」

「嘘つけーーー オレが転校して來た時、 死んだ魚の様な目をしてたぞ？  
！」

「てゆーかなんで住所分かるんだよ？ーーー！」

「幼馴染に不可能はないのです。 てへつ 」

「てへつ じゃねーよーーーまあ… いつか。 学校行くか。 」

「うんーーー！」

「そついえば、 勇人はもう決まった？」

「ん？ なにが？」

「何部に入るかだよー。 昨日、 話したじやん。 」

そうだった。この学校は必ずクラブまたは部活動に参加しなくてはならない決まりがあった。バスケット部に入ればいいと言われたが、バスケットは遊びでするくらいがオレとしては好きだ。だから、まだ何部に入るか決まっていない。

生徒会に入つていれば、部活動などは免除らしい。

「そういえば生徒会の人数が足りないんで、募集してるみたいだよ。でも、勇人は生徒会になんか入らないよね？あたしと一緒に」とお料理クラブに入るんだもんね？」

「お料理クラブはないな…」

「ええ～？…どうして！？楽しそう！」

「料理とか苦手で…」

「じゃあ、いつも何食べてるの？」

「買い溜めしたインスタントラーメン。」

「そんな物ばかり食べてたら、身体に悪いよー。今日の夜から、あたしが作りに行つてあげるね」

「いや、わぬによ。だいじよーふ。

「おう。」

「おーい君たちー早く入らないと遅刻するぞー。」

「げー！ヤバー！ダッショだよ勇人ー！」

「あ、おうー。」

なんとか間に合つた。それにしても、お料理クラブはキツイよな…  
絶対ムリだわ…

そういうえば、生徒会がメンバー募集してたみたいだ。面接とかあるみたい。どうせ決まってないんだし、行ってみるか…



ある日の日記（後書き）

次回！新キャラ来ーる？

## 生徒会入会面接

とつとう来てしました。

今工藤勇人は、生徒会入会の為の面接会場に来ている。何故、生徒会に入るのに面接が必要かつて？オレだつてそう思つたさ…でも、ここに来て理解した。それと同時にちょっぴり後悔した。

「会長たん…はあはあ…」

「もげーーー会長もげーーー！」

「生徒会長は、俺の嫁！」

「いや、拙者の嫁で！」「やるよーーー！」

「なにをーーー！」

アメリカにいた時から、日本のタタク文化？は知つていて、面白いなーと思い否定する人の気持ちが分からぬくらいだったのだが…ここに来て少しだけ気持ちが分かつた気がする…生徒会長を見た事はないのだが、

これだけの人数（ざつと全校生徒の3分の一はいる）が集まるつて会長どんな顔してんだ？

「おい、貴様…」

「え？ オレっすか？」

(うわつー絡まれちゃったよ…)

「つむ…貴様だ。」

「は、はあ…。で、何の用でしようか?」

「貴様、見たところ何の『力』も持たぬ一般人の様だが…貴様も、面接を受けるのか?」

独特の喋り方の中、面接というフツーの言葉が出て来たため、笑いそうになつた。

「ふ〜ほん、ごほん!すいません。あ、面接なら受けますけ〜」

「それは辞めておけ!貴様の『力』はまだ覚醒していない!邪氣眼を持たぬ一般人如きが面接に向かうという事が、どういう事なのか分かっているのか?我の邪氣眼は、『时空移動』クロノスワープ』空間を捻じ曲げ、時を止める事や空间移動などが可能。しかし、その代償にじゅ

「次の方ー!」

「ひ、ひゃい…」

なんか怖かつたけど、きっと根はいい人なんだろうな。

さて、次はオレの番か。

どんな事を聞かれるんだろう…もし落ちたらどのクラブに入らつか  
?などと考えてる間に、

「次の方どうぞーー!」

「あっ、はーー!」

オレの番だ。

トントン…

「入りました。」

「失礼しまーー!」(うげーー!)

そこには、顔には出していないがかなり不機嫌そうな生徒会長?が  
いた。

「b、私が生徒会長の五十嵐真琴だ。」

どうやら、生徒会長らしい。なるほど…沢山の一達が生徒会に入り  
たがるわけだ…スゴく綺麗だ。咲が可愛く見えるくらいに…

「どうした?座らないのか?b、いや私は今機嫌が悪いんだ…早く  
してくれないか?まつたく…さっきの厨一病といい…チヤラチヤラ  
した根性無しといい…ブツブツブツブツ…」

厨一病というのは、さつきのジャキガン使い?の人の事だろう。

「あっ…すいません。」

「理由は、私が疲れたからだ。さしこうだが君には、会長の私の補佐。つまり、副会長になつてもうう。明日からよろしく。今日はも

「はあ？！」

「合格だ。」

「あの…直接始めないんですか?」

長い沈黙が続いている。かなり気まずい。めちゃくちゃ見られてる。

じ  
つ

「帰つていいぞ。」

「え？…ちよ、速すぎじゃないですか？」

「文句があるなら辞めていいんだが。いや、私としては辞めて欲しくないのだが。」

「え？あ？やりますー。じうじうよろしくお願ひしますー。」

そして、オレは生徒会に入ったのだった…

## 帰り道 親友との再会

面接の後、咲との帰り道で生徒会に入った事を報告した。

「ええつ？！勇人、生徒会に入ったの？！」

「うん。面接に合格しちゃってさ。これで部活は、免除だな。」

「そんないーー！お料理クラブに入るって言つたじゃんーー！嘘つきーー！  
咲が駄々をこねる。面倒くさいの上ない。」

「言つてませんーー！」

「おつ？ーーお前勇人か？」

後ろから名前を呼ばれたので、振り返つてみるとそこには、

だらしなく制服を着崩した男子生徒が居た。

「俺だよー！俺！俺！忘れたの？隣に居るの咲ちゃんだろ？ーー何ーー？  
付き合つてるの？」

「付き合つていないですよ。誰ですか？あなた？」

咲の顔が紅くなっているのは氣のせいだらう。

「…………」

「何だよ！2人して忘れちゃったの？昔よく三人で遊んだじゃん！本当に覚えてないの？！」

「すみません…」

「いいんだよ。今から名前言つけど、2人共思い出してくれなかつたら泣いちゃうよ？！」

「んじや、言つぞ…城花涼介

じょうかりょうすけ  
どう？思い出した？！」

「「あ～～～！～！」

2人同時に驚きの声をあげた。彼、城花涼介は2人と保育園からの付き合いであり、よく三人でイタズラなどをして遊んでいた仲だつたからだ。しかし、一つだけ違う所があった。それは、

「涼介ってあの涼ブーか？！」

「小学校一年生にして体重45kg越えという偉業を成し遂げた愛すべきポツチャリの？ちょ

「痩せたじゃん！涼介君痩せてスゴくカッコよくなつたね。」

「まあね。いろいろあつて痩せたのさーにしても勇人お前帰つて来てたなら連絡くらいよこせよ！」

「あははー！悪りい悪りい！」

「久しぶりに三人揃つたんだから、遊ぼうよーー！」

そして、懐かしいメンバーで遊びまくり連絡先をお互いに交換しあつた。涼介は私立の高校に通つているらしく、しかも涼介には彼女が居るらしい。涼プレーに先を越されるなんてなんか虚しい。涼介と別れ、家が近づいてきた。

「じゃー！明日ね。勇人！」

「おう！明日な！咲！」

この時、勇人は知らなかつた。ずっと自分達の後を付けていた人物の存在を…

月 日（月）

今日、転校してくる予定の生徒をチェックした。スゴくカッコよかつた。ぼくの好みのタイプの顔だった。

月\*日（火）

昨日チェックした生徒の顔が頭から離れない。一目惚れというヤツだろう。勇人という名前らしい。

勇人の事がもつと知りたい。会って話をしたい。

そうだ。法に触れる事はしたくないのだが、盗聴器という物を買つてみよう。住所は既に知っている。楽しみだ。

月々日（水）

無事に仕掛ける事に成功した。寝ている勇人を起こさずに仕掛けるのはドキドキした。

勇人の寝顔を拝む事も出来た。スゴくかわいい。夜這いをしたくなるのを抑えて、キスだけで済ませた。僕って我慢強いな。それにしても、幼馴染とか言って僕の勇人に擦り寄るごみ虫の存在が気に入る。まあ、虫は所詮虫。放つておこう。きっと、僕のキスが始めてだろう。

月\$日（木）

しばらく、勇人を観察していく分かった事がある。勇人は朝の予定を口に出して確認する。その甘い声で僕に愛を囁いて欲しいものだ。帰り道、勇人を見かけた。やっぱりごみ虫も一緒に…予想以上に厄

介な虫だこと。しかも、虫が一匹増えた。なんで勇人はあんな虫達に囮まれて楽しそうにしてるの？

なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？勇人の笑顔は僕だけの物。まあいい：明日からは勇人と一緒だ。

今日から、生徒会としての活動が始まった。

生徒会の活動はラノベやアニメなんかとは違つて、意外に地味な作業だといつ事が分かつた。放課後も活動があるので、咲とは一緒に帰れない日も出てくるだろう。夕陽が校舎内をオレンジ色に染める。他の役員達は作業を終えて下校してしまい、残つたのはオレと会長の真琴だけだ。気まずい。かなり気まずい。

「…………おい、聞いているのか？」

「ふえ？ あつ！ 何でしちゃうか？」

とりあえず、田上の人なので敬語で話す様にしている。

「まったく、ほうっとしてもらつては困るな……それと、その言葉遣い辞めてくれないかい？」b、私たちは同学年じやないか。」

「あつすみま」

「ほりつまた！ クス……君は面白いな。」

「（めん。 やつぱり何か変な感じがする。）

「いいんだ……とにかく君は何か秘密はあるかい？」

「まあ、人並みには……」

「b、いや私の秘密を教えるから君のも教えてくれないか？」

「ええ？ ! 必ず？」

「嫌なのか？ 残念だ……誰にも言わないのに……」

スゴく悲しそうな顔をしている会長を見てると心が痛くなつた。

「分かつた！分かつたからそんな顔しないでよ！」

「じゃあ、言いますよ。絶対引かないで下さいね……絶対ですよ。

こう見えてオレってスポーツやってたんで、結構筋肉は付いてる方なんですよ。細マッチョってヤツです。それで、たまに右腕の血管がバキバキに浮き出てる時があるんですよ。それを、眺めるのが好きなんです。他の人じゃなくて、自分だから良いんです。

「ああ、もうーーーだから言いたくなかったんだーーー！」

「いや、すまない。面白過ぎて言葉が出てこなかつた。なるほど。つまり君は、『自分の血管フェチ』なのか。面白いな。ほほっ…『自分の血管フェチ』なのかーーー！」

「ヤメテー」

「では、次は私の番だな。ふう…私なんて疲れるな。やつぱり『ぼく』がしつくつくる」

「はあ？」

「いや、だから自分の事をぼくと言つんだよ。女の子なのに…変だろ？」

「いや。別に変じやないでしょ？」

「本当か？君は認めてくれるのか？嬉しい。嬉しいよ。君の前でなら、ぼくと言つていいかい？」

「全然OKですよー！」

「そつか…ありがとづ。実は後一つだけ秘密があるんだ…聞いてくれるか？勇人。」

「何ですか？急に新たまつちゃって…」

「ぼくは、一目見た時から勇人の事が好きだった…」

「えつ？」

オレンジ色の光が二人だけを包みこんでいる。二人だけを…

## ストーカー日記 ver.B

秘密（後書き）

気がつくと、自分の腕を眺めてた…

ああつー・もつー・引かないで下さこよー・( 、・ー・・ )

「え？！」

オレはすぐには会長の言葉が理解出来なかつた。2人の秘密を言い合つて、それから急な告白だ。無理もない。ぶつ飛んでいる。

「いやなのか？ぼくの彼氏になるのは…」

「いや！？彼氏もなにも、会つてまだ一日しか経つてないんですよ？」

「一田惚れつてヤツだ。悪いか？」

そんなドヤ顔で言われても…

「お…おお……」

彼女の素直さに思わず、感嘆の声をあげてしまつ。

「それに勇人はアメリカに居たから知らないと思うが、うちの父は『五十嵐コーポレーション』の社長で、ぼくは令嬢なんだ。ぼくと一緒になら美味しい食べ物や、欲しい物のだいたいは手に入るんだぞ？損は無いとおもうが…」

『五十嵐コーポレーション』そつこいえば、今朝のニュースで特集されてたあの会社か…人工衛星や、電化製品…今話題のスマートフォンまで作つてゐるらしい。

「そんな…ますますオレと不釣り合ひです。もつと相応しい人がい

るはずですよー。」

「ぼくには頼しからないんだよ。」

「いや、でヨ」

「いやだー。ぼくは勇人じやなきやいやなんだーー。これから、君だけを見て生きていこぐ。これから、頼だけの事を考えて生きていこぐ。もし、頼が望むのならぼくの処・」

「「」みんなさーーー。考えさせて下わーーー。気持ちの整理がつかなくて…一田だけ考えさせて下わー。」

「分かった…いい返事を期待している。仮にぼくを振つたとしても、ぼくは君を諒めない  
。さつまは取り乱してすまなかつたな…」

「ふふ。大丈夫ですよ。じゃあ、オレはこれで。」

わつかは、考えさせてなんて言つたが…正直嬉しかつた。彼女はスゴく綺麗で、どう考へてもオレなんかとは釣り合わない高嶺の花だ。それと、彼女に少しだけ恐怖を感じてしまつた。どうして、出逢つて一日のオレに告白なんてしたのだろう。何故そんなに必死になれるのだろうと…彼女はオレの全てを欲しがつてゐる。そんな気がした…いい意味でも…悪い意味でも…



（後書き）白日

やつと、追いついたーー！

明日から、話を進めますねー！

「勇人が来ない。遅い。遅すぎる。」

送は、今日が、ひ生徒会の仕事がある通

「今日は生徒会の仕事がある間に、お手伝いを待っていた  
「思いきつて、中に入つて手伝つちゃあうかな?」  
「いけない! いけない! 邪魔しちゃ悪いもんね...」  
これからは、一緒に居れると思ったのに...  
「生徒会に入るなんて。あんまりだよ...」

（本当に遅い…もう帰っちゃおうかな？そうだ！こつそり作った合鍵を使って、勇人の家に入つておこう！そして、タジ飯作つて待つていよう！驚くだろうな～勇人！）

「ぼくは、一目見た時から勇人の事が好きだつた…」

(えつ?)

そんな事を考えてた彼女の耳に飛び込んで来たのは、生徒会室の中からの話し声だった。

「え？！」

彼女の頭の中が、真っ白になつた。

歪んだ笑みを浮かべ、深く濁つた眼をして、一人帰り道を急ぐのだ  
つた：

~~~~~

「ふう……ちゃんと書いた事が出来た。これが告白か……ドキドキするな……明日の返事が楽しみだ……今日は眠れないな。もし、ぼくの告白を断つたら……こいつその事、『監禁』でもしてしまおうか……クククッ……（そういえば、教室の外に『ミ虫』がいたな。ぼくの告白を見せ付けてやれたかと思うと実に気分が良い！清々しいな。）

勝ち誇った顔で笑みを浮かべる彼女の眼もまた、『ミ虫』と同じように深く濁っていた。

~~~~~

帰り道。工藤勇人は考えていた。会長からの告白を受けているのか？という事を

確かに嬉しい。嬉しい！あんなに綺麗な女の子から告白されて、最悪！！なんて思うバカはないだろ？。だけど、この告白を受けてしまってなにか変わってしまう物がある気がする。良い方ではなく、悪い方に…

断つてしまつのも、あとあと気まずくなるだろ？…付き合つとなると、咲はどうなる？

「あれ？家の電気がつこい。消したはずなの？」。

（ドロボウかもしれない。）

落ちていた力サを取り、慎重に玄関へと向かう。

「？～～～？」

鼻歌が聞こえる。なにか料理でも作つてゐるのだからか？良いくらいもする。

人ん家に忍び込んでいて、料理まで作つてゐるだと？……狂つてる。

勇氣を振り絞り、ドアを勢い良くあけた。

動き始める狂氣…

「だ、誰だ……」

「ひ、ひやあい……」

ドロボウが居ると思い、勢いよくドアを開けたオレの眼に写ったのは楽しそうにカレーを作っていた咲の姿だった。

「なんだ…咲か…って、何で中に入ってるの?…」

「あ、あの、その、カギが開いてて…ドロボウ入っちゃいけないと思つて…中で勇人のご飯作つて待つてようと思つて。『メン…』（合鍵作つたなんて言えないしね。）

怒鳴つて入つたため、スゴく怯えている。

「あつ。そりなの?…でもカギなら閉めた気がするし…」

「いいや…開いてたよードジだなア…」

「そりかあ?」

「あつ…もつ、カレー出来ちやつから座つて待つてー!」

「うん。ありがと!」

その後、咲の作ったカレーを食べた。

とりあえず美味しい。さすが、料理クラブに入っているだけはある。

「ねえ！ねえ！、味…どうかな？」

「うへへへへん…

「お」と。

「ふえ…嘘…折角作ったのに…」

「冗談だよー！」冗談！！すごく美味しい。辛い物苦手なオレの為にちゃんと辛さは控えめ…って、なんで辛いの苦手って知つてんだ？」

「良かつたあー。えつ？ーそんなの当たり前だよー。見てれば分かるつて！」

「そうか。ありがとな。」

「あと一つ。このカレーをなんかふつーのカレーと違う感じがするんだけど、何か入れた？」

「まさかった？」

「いや、不味くはないけど…なんか不思議な味があるよ。」

「愛がー」もつてるからねー！」

「アハハ！面白いね。今度、材料教えてよ。」

「あ、あのわ…話があるんだけど…」

「ん？何？」

「今日、家にはあたし一人しか居なくて不安なの。だから、今日は泊めてくれると嬉しいな…って。駄目だよね…迷惑だもんね…」  
家に一人という事は、ドロボウや不審者が入り込んできたら咲が危ない。答えは一つだつた。

「分かった。じゃあ、臭いかもしないけど寝る時はオレのベッド使つてな。オレは、親父の使つかひ。」

「全然臭くなんかないよ…むしろ…この匂…よ…」

「何か言つたか？」

「ううん…何でもないよ…」

「着替えとかはどうするの？」

「大丈夫！ちゃんと持つて来たからー今日一日よろしくねー！」

おかしい…ちゃんと持つて来たつて、まるで最初からオレの家に泊まるつもりで来たみたいじゃないか…

それに…家に来てみると、カギが開いていたつてどうしてオレの家に来ようと思ったのか…？咲には、生徒会の仕事があると言つたので咲より速く家に着かないなんて分からぬはずがない…しかし、

乗り気な彼女を追い出す事は、出来ないので泊める事にした。

「そ、そ、うか…準備いいんだな。」

# 長い長い夜が始まる…

始まる夜…近づく恐怖。（前書き）

ちょっと体調が悪かったので、  
久しぶりの投稿になります。m(ーー)m

## 始まる夜…近づく恐怖。

やつぱりおかしい。考えてみれば考えてみる程に『奇妙』。何故咲はオレの家に来たのだろうか?やつぱり理由が思いつかない。いくら幼馴染だから、カギが空いてたからという理由で普通家に入るものなのだろうか?少なくとも、アメリカではそうしなかった。

「おーい!勇人勇人!聞いてますか~?」

「うえ!~あつ何?~!」咲の様子から想像するとオレは相当考え込んでたらしい。

「急に怖い顔して考え込むから、ビックリしちゃったよ。何かあったの?相談乗るうか?」

オレは、会長の真琴に告白されたといつのを言こせつになつたのを抑え、出来るだけ自然に「なんでもないよ。」と答えた。最近思い出したが咲は昔から変に勘が鋭い所があつて隠し事などもバレてしまつくらいだつた。

「ふうん…そづ。」

「や、そうだ、お風呂なんだけど先に入つていいからね。お湯の出し方は分かる?脱衣所の所のボタンを押すんだよ。今は38だけど熱かつたら温度下げていいか。」

「わ、悪いよお。勇人から入つて。」

「オレは、学校の書類をまとめなきゃ寝れないしさあ…遠慮すんなつて。」

「生徒会のお仕事？」心配そうな眼でこちらを覗き込む。その大きな眼で自分の心の中を見透かされてるようで鳥肌がたつた。

「う、うん。大丈夫だから…速く入ってきなよ。」

「うん！分かった。お言葉に甘えちゃうね！」優しい笑顔をオレに向けると、嬉しそうに脱衣所までトテトテと歩いていった。この笑顔を見ると、さっきまでの考えは何処かに飛んでった。

「さあて。仕事仕事！」オレは机の上の書類をまとめる作業を始めていった。

服を脱ぎ、脱衣所のボタンを押し私は風呂に入った。さっきの様子だと、勇人は真琴に告白された事で悩んでるようだった。

「めっちゃ同様してたし…勇人つてばウソつくる下手すぎ…」そう小さく呟くと、私は髪を洗う為に、シャンプーを手にとった。そして、髪を洗おうとしたその時。私は見つてしまつた…

「えっ？なにこれ？」

それは、普通にみれば、勇人のシャツだらう。でも、なんでこんな所に？ふつーシャツを洗う時は、洗濯機に入れて洗うはず。どうしてお風呂場なんかにあるのだろう。見た所、目立った汚れはついていない。

そして、  
ど う し て ボ タ ン の す き  
ま  
い る か ら ケ 一 ブ ル が で て  
の の ？

(勇人があたしの裸を撮ろうなんて事はしないはず…じゃあ、勇人の？でも…誰が？何の為に？)

私はソレをボタンから引きちぎると、外の闇の中に放り込んだ。

## シツモン

「咲のやつ、遅いな…なんかあつたのかな?」風呂に入つてから1時間半以上経つていいのだ。昔、親父が言つていたが『女の子はとにかく男を待たせる生き物だ。それを耐えるようになつたら一人前。』だつけ?これはいくらなんでも異常だ。

「ちよつと、ドキドキしちゃうけど心配だし様子見てくるか。」資料を纏め終わつたオレは、咲のいるお風呂場へ向かつた。

「ふう…風呂場だけで、5個か…」私は、『ソレ』を見つけた後他にもないか調べてみた。結果は、言つた通りだ。一体誰が?何の為に?勇人が、私の裸を撮るためなら許そう。むしろ、見せつけてやりたい位だ。しかし他者が、勇人の全てを見たり聴いたりという欲の為に仕掛けたのなら、私はソイツを許さない。

「おーい?咲?大丈夫か?」脱衣所の扉の向こうから心配した勇人の声が聞こえる。

「えへへ…大丈夫だよ。勇人んちのお風呂気持ちよすぎて、長湯しちやつた。今から上がるね。あたしの裸みたいでしょ??」

「うわつ何言つてんだよ？！全然見たくねーし！！オレは、日本に帰ってきて、悟りひらいちやつたから！賢者になつちやつたから？！全然コーフンしないし！…キ、キヨーニモ無いし…！」

嘘だ。100パーセント中、200パーセントは動搖しているだろう。動搖しそぎて、声が裏返る所もあるくらいにね。

まあ、そんな所が可愛くて大好きなんだけど…

（勇人は自分の身に迫る危険に気づいてないかも知れないけど、あたしが守つてあげるね！『幼馴染』として、そして、『未来のお嫁さん』として…）

トントン…

「勇人お？まだ起きてる？」

寝る準備をしていたオレを訪ねて来たのは、パジャマに着替えた咲だった。

「『めんね…こんな遅くに…一人じゃ寝れなくて。』

（やつべ！…パジャマ姿かあいいよお～～！…！…お持ち帰りい

「……！」（自分家か…）なんて、アニメ化された某サウン

「全然、問題ないって！！あつ、飲み物持つてくるね。コカコーラがいい？それとも、ペプシ？」

「どっちも、コーラじゃん！！あたしは歯磨きしたからお水でいい。勇人は、まだ歯磨きしていないの？」

「うん。今からじょりと想つてた所。じゃあ持つて来るから、ちよ  
つと待つてな。」

「こ」は確か、お父さんの部屋だつたわね……こにはないようね……さつき勇人の部屋を見たら10個はあつたわ……やつぱリストーカーみたいね……まあ、勇人の部屋のも引きちぎつておいたけど……

「おつ待たせ～！はい！」

「ありがとう！なんかテンション高いね勇人」

「まあね！深夜のテンションなんで！ハイにもなるよ！」  
Y—！—！—！

「あははっ！ それ、ディオだよね？」

「うん！咲、このまんが好きだつたら？オレも読んでみたんだ。どうかな？」

「うーん…やっぱり、URYYYYYじゃなくてWRYYYYだよね！」

「な、何が違うんだ？」

「ふつふつふ…お主はまだまだ未熟なのよ～。しではなく、Wなのだよ。発音やー…わつとー…」

「だからどう違つとだ？！やっぱり分からん」

「だからURYYYYじゃなくて、WRYYYYだよー。」

「あああ…わかんね～！」

その後、あたし達は他愛ない会話を楽しんだ。

そして、あたしは本題とも呼べる事を聞くことにした。

「ねえ。勇人わあ、最近変な事ない？」

「なにが？どんな風に？」

「誰かに見られてる気がする。とか、後をつけられるとか…

「なにそれ？怖い。けど、そんなのないな。」

「そり…じゃあ、もう一つね。

勇人さあ

会長に告白されたでしょ？」

外では、涼しい夜の風が吹いている。

## 結論

「会長って真琴さん？そ、そんな事あるわけないじゃん！な、なははは…」（何故？何故知っているんだ？あの時は帰ったんじゃなかつたのか？！）

「あたし、嘘は嫌いだな。聞いてたよ。全部。」

「だから、そんなん。」

「嘘よ！……！」一度も言わせないで……！あたし、嘘は嫌いなの。ねえ～どうして嘘なんてついたのかな？あたしに言つちや気まずい理由でもあつたのかな？」

「わ、わかつたよ。嘘ついて悪かつたよ。ごめん。」

「はあ……はあ……分かればいいよ。でも、なんで嘘なんかついたのかな？あたし、わかんないから納得できないよ。」

「「ゴメン。隠すつもりもなかつたし、急に聞かれてしまつて咄嗟についてしまつた嘘なんだ。今から相談する予定だつたんだよー。」

「そう……わかつた……返事……どうするの？」

数分経つてオレは結論をだした。

「オレは……

断ろうと思う。」

考え抜いた末の結論だった。確かに、真琴さん程の美人に告白されたのだ。断る方が罰当たりかもしない。しかし、彼女程の人物にはそれ相応の人物が居るはずだ。オレみたいなのでは釣り合わない。それに、オレには咲がいる。いるといつてもただの幼馴染。それだけの関係だが、それでもいい。それだけで幸せなのだから。それ以上は望まない。

「そつそつだよね。勇人には、持つたいたいくらいだもんね……  
も、……しい……も。」

「そうだね。」最後の方に咲が何か言ってた気がするが、もう寝ると言つて聞かせてくれなかつたので寝る事にした。

そして、朝がやつてくる。

## 結論（後書き）

やつぱり、小説って難しいですね。

次は、キャラ紹介Part2予定。

## 約束+ストーカー視点

ジリリリリリリリリッ…………

普段聞き慣れない音で田が覚めた。スゴくうるさい。確かに、家の時計はデジタジリリリリリッ！こんな音はリリリリリリッ！出なりリリリリリリッ！…はリリリリリリッ！…

ああつ……もつ、つるといなアツ……

リリリリリッ…カチッ！

オレが時計を止める前に、咲が田を擦りながら時計を止めた。

「おはようございます。勇人……」半分寝てしまつてこる…

「おはよつ……って寝ちゃつてゐじやんつ……おーい…起きあひ起きてほつぱたをペチペチして田を覚ませる。

「ん~…痛いよお~…」良かつた…どうやら田覚めたようだ。

「この田覚まし時計つてさあ~…咲の~?~

「うん。どーしたの?~」

「いや…スゲー音だなつて思つたんで。」それに、この模様だ…可愛らしい花柄。咲にピッタリだ。

「でしょでしょ~ーあたし、寝坊ばっかりしてたから。このくらいの音じやなきや起きれないの。あつ~。」めんね。迷惑だった?~

「いや。大丈夫だよ！オレもこの位の時間にいつも起きてるからさ。」

「

「そうなの？良かつたあ。この時計ね、命の次に、大切な物なんだ  
……」

「へへ～。なんで？」

「覚えてないの？」

「えつ？」覚えてるもなにも、オレとこの時計の接点が見つからない。

「忘れちゃってるの？教えてあげるね！」

この時計。勇人が、誕生日プレゼントとしてあたしにくれたんだよ  
！――

「マジで？！」でも、オレが帰ってきたのは最近だから……相当昔の物  
じゃないか！」

「うん。止める時も、優しくボタン押したし、壊れたら直して使つ  
てたの……叔父が時計屋さんだから……直してもらつたり……」そう言つ  
咲の顔は少し赤い。

「そつか……ありがとな。忘れててゴメンな。」

「あたしこそ……あたしは貰つてばっかりで……あたしも、プレゼン  
トあげようと思つたんだけど……その日に勇人は引っ越しやつて……  
だから……今年こそ、絶対渡すんだ……って勇人が帰ってきた時決め  
たの。」

「じゃあ、楽しみに待つてるからモー。」

「うん……約束だよ？」

「おりー約束なー。」

「ふん！何が約束だ……害虫如きが……」ぼくはズゴク腹が立つていいる……誰に？『誰に』といつ言葉の使い方は正しくない。こつそり合鍵まで作り、その上凶々しく勇人の家に泊まり込んだこの『害虫』にだ。『誰』というのは、人を指す言葉。したがって、この蟲には使つてはいけない。

「しかし、盗聴器と、カメラの殆どが壊されてしまった。残ったのは、盗聴器と勇人の部屋のカメラ一個ずつだ。害虫だからと油断していたが……それに……勇人は、ぼくの告白を断るつもりらしいな……おもしろい……」ぼくは、執事を呼ぶ為のコールボタンを押した。

五十嵐家の間は、このコールボタンを押して執事を呼ぶ。家族一人に一つずつ、配られており父、母、ぼくに一人ずつ専属の執事が

いる。このシステムにより、仕える執事の負担を和らげより良いサービスが出来るようになっている。因みに、五十嵐家の人間は執事に頼る事をあまりしないので執事も楽だろう。する事と言つたら、父と母の仕事の秘書役くらいだ。家事などは、家政婦がたくさんいる為する事はない。もちろん、家政婦にも負担はかけないように最善の努力をしている。

「お呼びでしょうか？お嬢様。」優しい声でぼくに話しかけるこの男性は、執事の冴木。ぼく専属の執事だ。

「ああ。ぼくが前に話した事。覚えているかい？」

「プロジェクトHでござりますか？」

「そうだ。実行する事にした。作戦開始日時は、来週の月曜日。夏休みが始まるからな。」

「かしこまりました。」

「i5達にも、連絡してくれ。」

「かしこまりました。」

「下がつていいで。」

「お嬢様。一つお聞きになつてもよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「本当に、あの様な男で良いのですか？お嬢様には、もっと素晴らしい男性が世の中にはいるは？」

「たわけ！…ぼくが愛しているのは勇人だけだ！それ以外の男など興味がない！…いくら冴木でも、怒るぞ！」

「失礼しました。以後気をつけます。」そう言い、冴木は部屋から出て行つた。

「来週が楽しみだ。クククッ…」

約束 + ストーカー視点（後書き）

キャラクター紹介しねうと思つたのですが、紹介するキャラクターが少ないので本編を進めることにしました( 、 、 )

冴木の言葉書くの難しい（、・ー・）

## プロジェクトH

長かった学校も終わり、気づけば放課後になつていていた。生徒会室に向かうと、そこに会長の姿は無かつた。

「あれ？おかしいな…たしか、ここにで合つてたはずだけど…」そう…オレは昨日告白された。相手はこの学校の生徒会長であり、かの五十嵐コーポレーションの令嬢さん。五十嵐真琴にだ。彼女は、容貌端麗。才色兼備。<sup>バーフェクトちようじん</sup>といった言葉が似合つて、まあ…一言で言つてしまえば完璧超人なのだ。

そんな彼女に告白されたのだが、オレは断ろいつと思つ。彼女にはもつと相応しい人が居る筈だ。オレなんかが付き合つてしまえば、彼女だけでなく、彼女の親族にまで迷惑を掛けてしまつだらう。

それに、オレには咲がいる。この告白を受け入れてしまえば、今のが楽しい日常が壊レテしまつ…そんな気がして…

「ん？手紙だ…」机に、可愛い封筒に入つた手紙がある。中には、

ヘヤカラ<sup>ガ</sup>テテ。

指示に従つ。部屋から出ると、さつきまでは無かつた手紙が廊下の  
真ん中に落ちている。

ガツコウカラ<sup>ガ</sup>テテ。

これも指示に従う。だって、従わなきゃ会長に返事を書ひ事が出来ない。

「すみません。君が勇人君?」

「へつ?!何ですか?!」急に知らない女の人にはしきられため吃驚してしまう。

「この手紙、貴方に渡して欲しいって頼まれたのよ。」

「そ、そなんですか。有難うござります。」

「いえいえ…」

手紙の内容は、

ナギサチヨウシゼンコウホンニキテ。

渚町自然公園…昔、オレと咲がよく遊んだ公園だ。結構広い公園だ  
ったため、咲がよく迷子になり泣いていたのを覚えている。

場所は、結構遠い。  
よし…行くか。

公園に着く頃には辺りは薄暗くなっていた。

「おかしいなア…人一人いやしない。」嫌な予感がする。

自販機の灯りが、薄暗い公園内の散歩道を照らしている。そこにボ  
ツリと手紙が落ちている。

きっと、会長がまだ近くに居るのだろう。とりあえず拾つて中身を  
みる。

ウシロ

「え？」

ガンツ！－！－！－！

振り返る寸前に後頭部に強い衝撃を受けた。

「あはははははははは...やつたあーほへ出来たよおープロジェクト

クトH大成功ダア～！！あははハハハハはははははああひひひ  
ひひはひはひあはあはははは！～！」

気が遠くなる中オレが聞いたのは、ひぐらし達の鳴き声と、狂った  
様な笑い声だつた。

月××日

今日は凄く気分がいい。ぼくが1番欲しかつたものが手に入つた。

まさか、勇人があつさり来てくれるなんて…

ぼく嬉しいよ。

今から、愛しの勇人の所へ行つて来ます…



## プロジェクトE（後書き）

監禁 オンー！

## フタリキリ

「よしつー！今日も勇人ん家に行くぞー！」

あたしは張り切つて勇人の家に向かう。明日から夏休みだ。今日は、勇人の家に泊まつてみようかな？

「お邪魔しまーす。……あれ？まだ帰つてなかつたのか…そうだ！部屋の掃除とかもしておこう。」あたしは、最近勇人から家の合鍵を貰つた。あたしがコツソリ隠し持つてた物と合わせて二一つ目だ。これは、気があると見ていいのかな？かな？

「？～？～ … Hな本とか見つけたらどうしようつ？／＼」あたしは慣れた手つきで掃除をする。

「んー？」これは……なあーんだ…ジャンプか…」ベッドの下に置かれてたから誤解しちやつたよ…

早く帰つてこないかなあー？

今日の夕飯は、勇人の好きなハンバーグにしよう。

「ん……？」は？」「田の前には、白い天井。どうやら、病院のようだ。

「あれ？なんでオレ病院なんかに？ってなんだ？！コレ…？」違つた。ここは病院なんかじゃない。何故なら、オレの右手、左足には

頑丈な鎖がベッドの柵に繋がれていたのだから。

思ひ出しある... そうだ。ホレせぬのと、

「目が覚めたようだね。勇人。」急に部屋に入つて来たその人物の声でオレの思考は止まつてしまつ。まあ……いい。これでハツキリした。

「なんで、なんでこんな事するんですか？会長？」そつ。彼女だ。五十嵐真琴。オレはあの時、彼女に気絶させられて此処まで運ばれたのだろう。

「『雲長』……なんて、冷たいなア……ほへては、『真琴』つてこいつね。前があるんだ。名前で呼んでくれ。」

「そんな事より…」「レ、解いてくれませんかね？」繋がれている手錠に田配セをしながら話す。

「何を言つてゐるんだい？やはり君は面白い人だ。大好きな勇人を逃がしてたまるものか。ずっと、ずっと…

ハ  
ヤ  
ト  
ハ  
ボ  
ク  
ダ  
ノ  
モ  
ノ  
モ  
ノ  
ダ  
リ  
愛して。大好きだ。好き。好き好き。大好き。好き好き好き好き  
好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き  
好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き  
「呪詛の様に愛の言葉を呴き続ける彼女はハツキリいつて怖い。と  
りあえず、離す気はないらしい。

「ぼくはこんなに勇人が好きなんだ。もちろん。勇人もぼくが好きだわ? 昨日、ゴリを家に泊めたらしげ。あんなゴリと一緒にい

ると、勇人自身が腐つてしまつた？ぼくが浄化してやる。」ペロリと頬を舐められる。鳥肌がたつ。「ミミ、昨日泊めた？」

「昨日泊めた『ミミ』てまさか、咲の事ですか？咲は『ミミ』なんかじゅありませんし、なんで会長が知ってるんですか？！」

「何を言つてるんだ？ぼくは君の事なら全て知つていい。3日前に、ジャンプという漫画雑誌を買つたよね？昨日のご飯はカレー。『ミミ虫』が作つたカレーだつたね。ん？待てよ？それを食べた訳だから、口の中も、内臓も、毒されていつてしまつたのでは？これもだ。これも浄化シナキヤ…」

驚いた…彼女はオレの最近の行動パターンを全て知つていて。つまり、何らかの形で、『見たり』『聞いたり』している。鳥肌なんてものじやないぞ…日本に来てから今日まで、ずっと監視され続けていたのか？

「フフフ…可愛いよ。その顔も…大好きだ。」

オレは、どうなつてしまつただろう？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5983x/>

---

もう君を離サナイ

2011年11月23日13時48分発行